

VR導入 火災をリアルに体験

茨城県立境特別支援学校

茨城県立境特別支援学校（生野亭）校長、児童・生徒308人は、より現実的な防災学習を目指し、民間企業が提供するVR（仮想現実）を導入した。先月は、高等部の3年生が専用のゴーグルを装着し、リモコンを使いながらオフィスで火災が起きる場面を体験。被災時に、自分の命を自身で守る「自助」や周囲の人と助け合う「共助」の意識が高まっているという。

自助・共助の意識高まる

同校には、知的障害や肢体不自由の児童・生徒が在籍。ランドデザイン（重点目標の一つとして「大災害に備えた防災体制の確立」を掲げている。毎月1回、避難訓練などを実施してきた。日本最大級の流域面積を誇る利根川が、同校の徒歩10分圏内にある。水害発生時のハザードマップは、校舎の4階まで浸水する可能性を示している。

防災学習では、避難訓練をはじめ、地震発生時の行動を一斉に試みるシェイクアウト訓練、保護者に児童・生徒を引き渡す訓練などに取り組んできた。

利根川の氾濫による水害をはじめ、地震やミサイルの危機を想定。それぞれの被害は異なり、育に敏感な児童・生徒がさまざまな被害をあらかじめ聞いておき、万一の事態に備えた雨天でも実施できるように、各教室に雨具を保管し

オフィスビル被災など5場面を想定



オフィス内に充満する煙を避けるために、姿勢を低くする生徒

ている。

同校で防災訓練などを担当する園田孝教諭は「火災連動し、音と共に、その場にいるような感覚が得られる。自分ごととして防災について考えるためには非常にリアルな体験をさせることが大切」と話す。

VRを活用すると、児童・生徒は仮想空間の中で、実際の災害を体験できる。見たい方向を向くと映像が当る。園田教諭は「火災連動し、音と共に、その場にいるような感覚が得られる。自分ごととして防災について考えるためには非常にリアルな体験をさせることが大切」と話す。

で体験の場を設けた。

同校は、地震災害からの救出をテーマにしたゲームソフトなどを制作する企業と共同で開発した。火事や地震に遭った際のオフィスビルや街の状況を想定した5つの場面を体験できる。火災や煙に気を付けながら、避難経路を見つけて逃げることを目指す。避難のような装置（ヘッドマウントディスプレイ）を頭に装着し、専用のコントローラーを操作すると、移動できる場所が青い点で示される。

無事に避難できた場合、画面に「避難成功」と表示されたり、映像の中で起こる地震の揺れが振動として、ゲーム感覚で訓練に

迫力の映像、「避難成功」に歓声

「煙を吸わないように、もう少ししゃがんで」

当日、生徒たちが体験した場面は、会社の1室でパソコンを



目の前で火の手が上がる現場から避難経路を探した

ンから発生した火災に代わり、ヘッドマウントディスプレイを装着する建物内では、他の生徒に聞こえるような火災警報のベルが鳴り出した。園田の生徒は声を掛けながら、火災からの逃げ道を使った防災訓練が簡単にできる。トラックを改造した専用車両を「VR防災体験車」として用意。申し込めば、会場までの車両を走らせ、現地でVRを通して災害を体験できる。

「煙や火が目に見え、逃げ道を探さなければならない」と体験を振り返る。80・87・8231

った。

能防防災は火災現場体験VRを学校現場などに貸し出している。専用サイトから注文すれば、ヘッドマウントディスプレイやコントローラーが送る。4日間と7日間の期間を定める。VRはコンピュータゲームで活用されている他、防災訓練用の商品があり、複数の企業が手付けている。同校は、火災の場面を体験したが、洪水や土砂災害の場面なども開発されている。東京消防庁では、VRを使った防災訓練が簡単にできる。トラックを改造した専用車両を「VR防災体験車」として用意。申し込めば、会場までの車両を走らせ、現地でVRを通して災害を体験できる。